

『怠け者の

才能、  
灯る』

ザッ

ドッ

ザッ

才能に甘えた男が、  
自分の足で  
立ち上がるまでの物語。



「……今日も、  
だるいなあ」

ダン…ダン…  
ダン…



放課後の体育館は、  
昼の熱が残るせいで  
空気が重い。



円堂、前に！  
シュートフォーム  
見せてくれ！

シュ

シュー

別に、  
普通でしょ

「円堂、大丈夫!?  
病院行く?」

ズザッ

ズザッ

「……行かない。  
たいしたことはない」

ゴゴゴ...

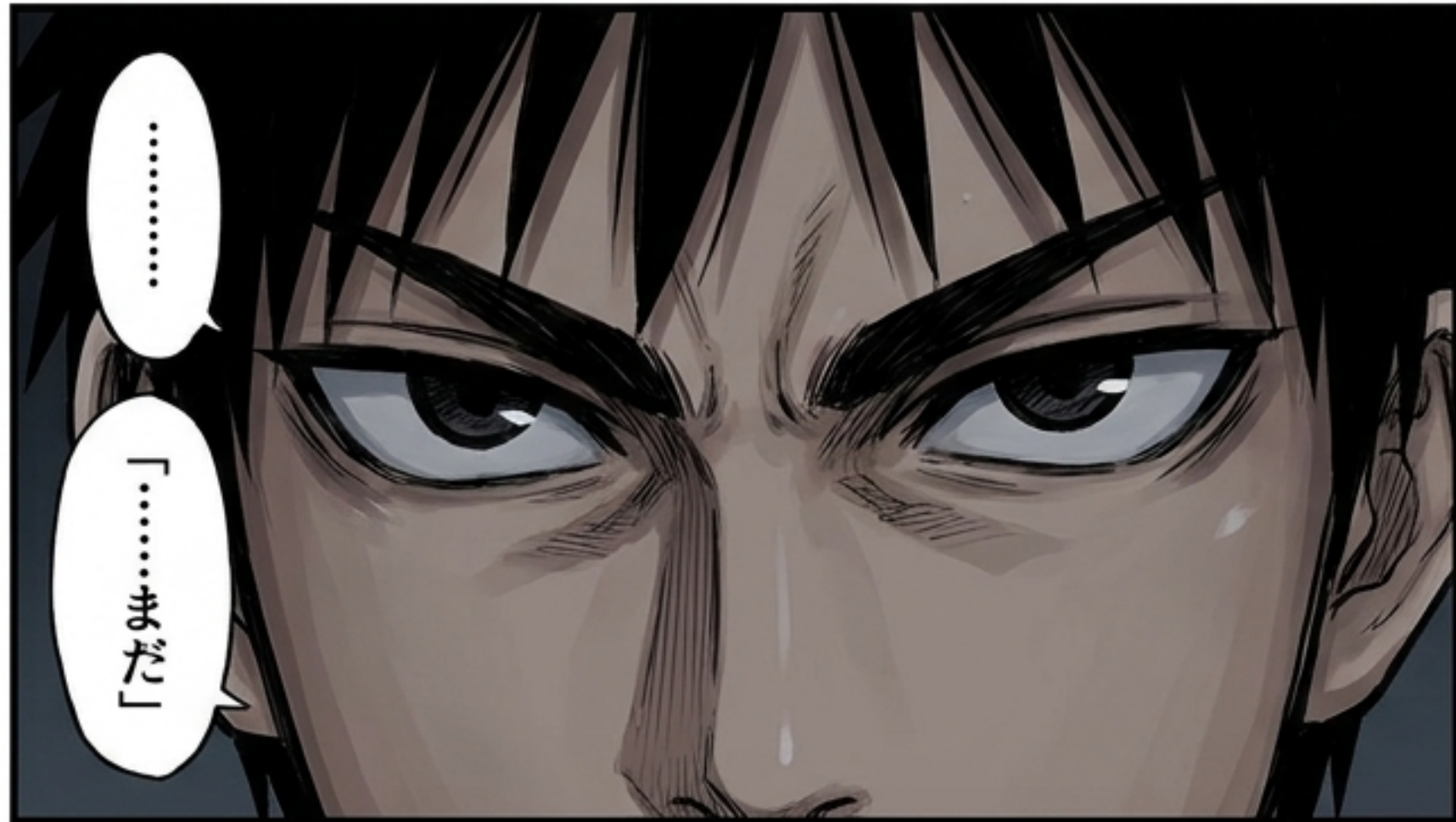
ゴールに向かう時だけ、  
体が勝手に動く。

手が覚えている。  
才能が勝手に形としてしまう。

—もし、

それが止まったら？






.....

「.....まだ」




普段なら絶対に  
しないことをした。

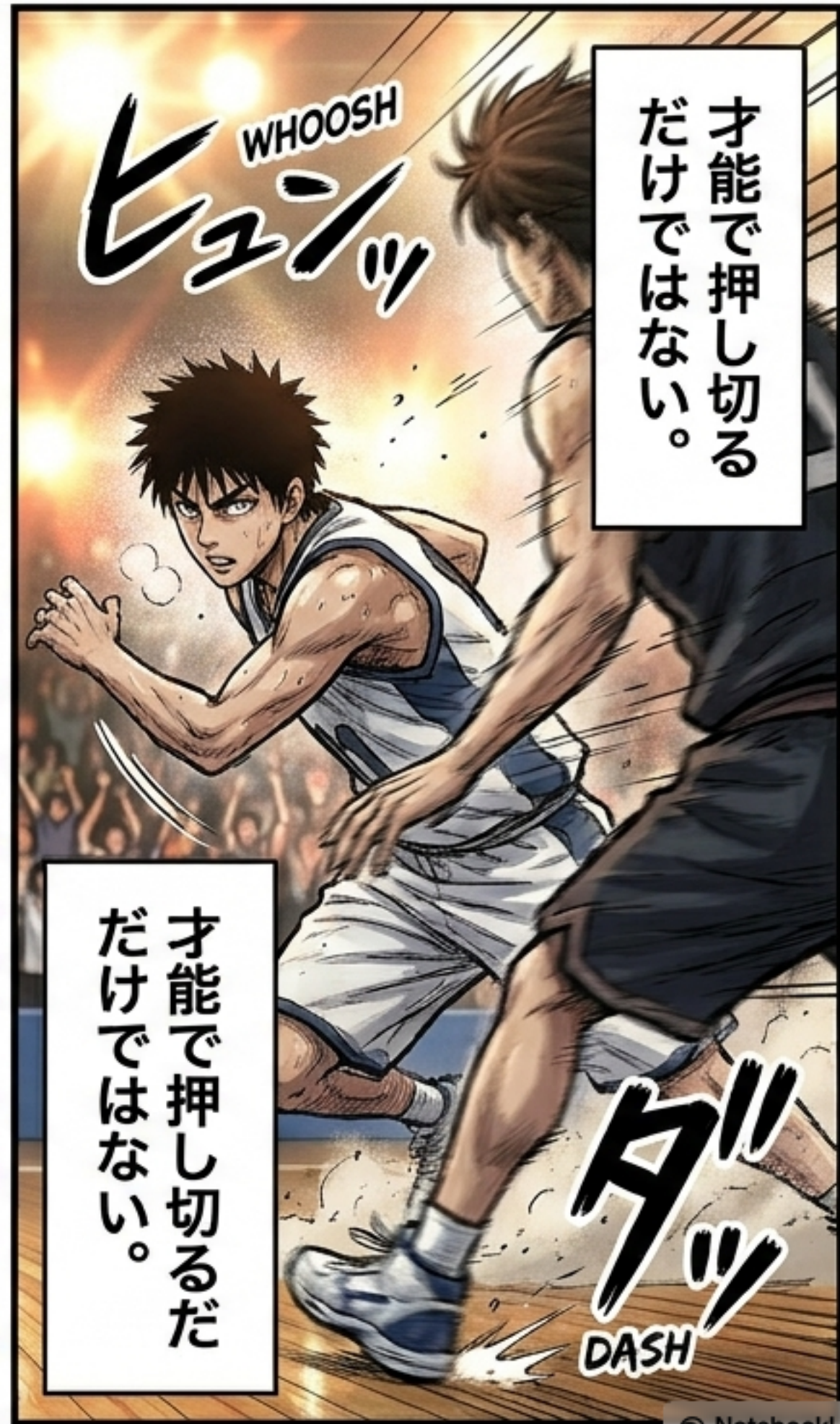
ゆっくりと、丁寧に、  
一本一本を確かめるように。



「もうどうとかが、  
そいつらいつのそいつらいつのじやない。  
俺が、俺のままじゃ嫌なんだよ」



「円堂、すごいな……」





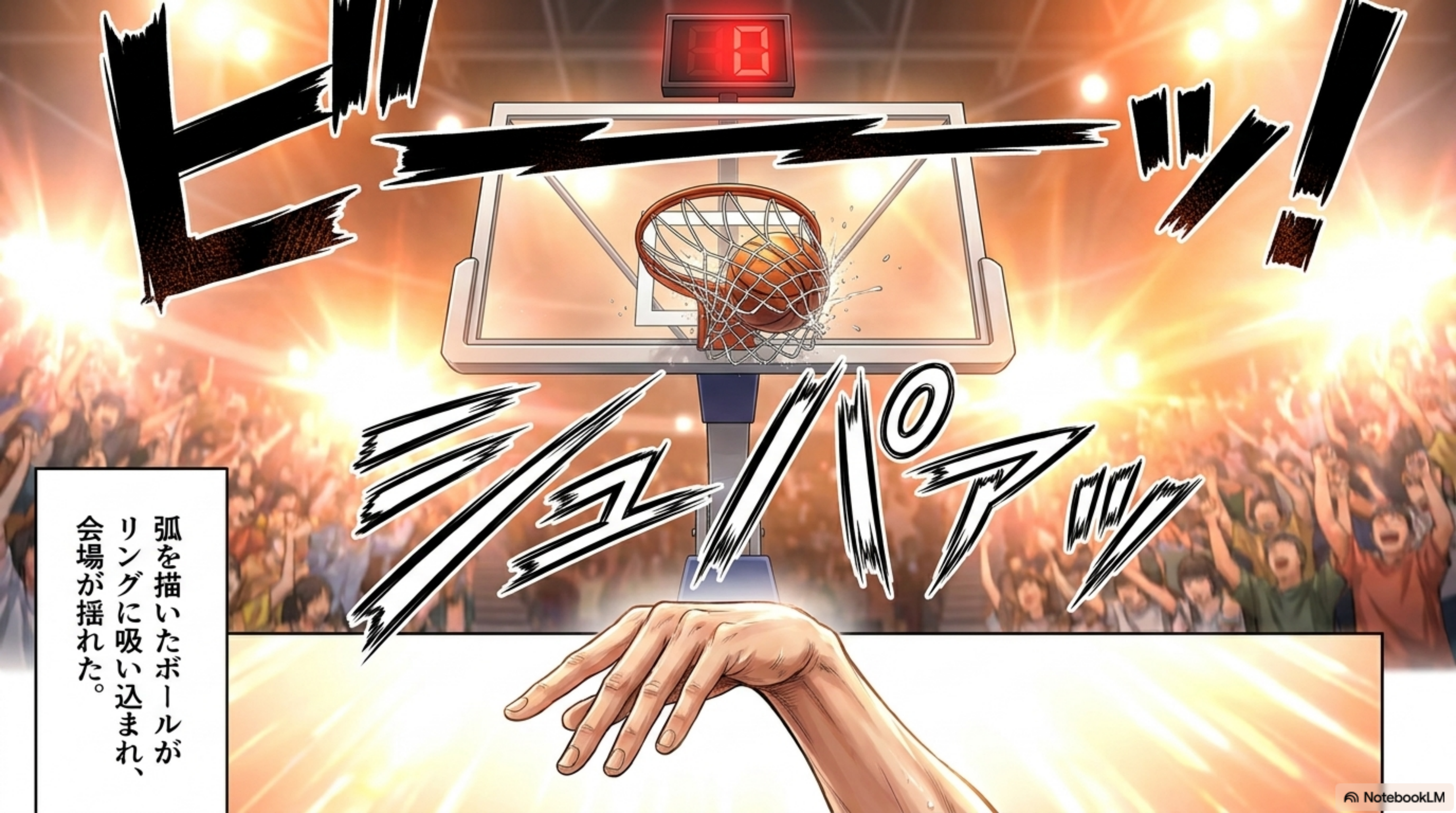
怠け者らしく  
時間を引き延ばした  
わけじゃない。

ドクン... ドクン...

ズズズ...

残り二十秒。  
一点差。  
足首が痛む。





弧を描いたボールが  
リングに吸い込まれ、  
会場が揺れた。



「……化けたんじゃない。  
俺が、ちゃんと向き合っただけ」

決めてかったら  
できろうことが  
住んいですか……



「円堂、お前は  
本当に化けたな」

怠惰だった心が、  
熱に変わっていく。

次の練習が来るのが、  
待ち遠しかった。

完